

とく



2021年12月16日 NO.619

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会 広報部
〒460-0018 名古屋市中区門前町1番23号

東海教区教務所内

TEL 052-321-0028 FAX 052-332-4097

e-mail info@tokai-hongwanji.net

東海教区 教化団体代表者紹介

各教化団体の代表者を順次紹介いたします



本年はコロナ禍で一泊研修会等の諸事業に苦慮していますが、一致団結して頑張ります。

門徒総代会 会長

中根 義一（額田組長光寺）



保育連盟理事長を拝命し10年になりました。今後の保育連盟の発展を目指し、親鸞聖人の生き方に学び、「まことの保育」の一層の拡充に努めて参ります。

保育連盟 理事長

佐々木 正利（三重組光念寺）



寺院のネットワークを活かして、誰もが地域で豊かに暮らす（望む生活の実現）ための支援をしていきたいと考えます。

社会福祉推進協議会

副支部長 代表

安田 淳（三重組正久寺）



普通に挨拶ができる明るい日が一日も早く来るよう願います。

門徒推進員連絡協議会 委員長

神谷 正隆（海幡組蓮成寺）

Contents

教化団体代表者紹介	P1
こころばなし	P2
声	P3
特集	P4.5
連研のススメ	P6.7
お坊さんの書棚	P8

『抱かれてあるいのち』

日置 宗明（朝明組信明寺）

「誠に申し訳ありませんが、ご出講賜る予定でした今度の法要ですが、今回は内勤めとさせていただくこととなりました」と、大阪のご住職からの電話。「この状況では仕方ありませんね」と、返す私。悲しいかな新型コロナウイルスが蔓延してからというもの、こんなやり取りに慣れてしまっています。

後日、その先輩ご住職から、お詫びのしるしにと焼酎が届きました。ラベルには「無一物」と書かれていました。その言葉を目にした私の脳裏に浮かんだのは、恩師、かけはしじつえん 梯 實圓和上のお言葉でした。

「本来、人間は無一物で生まれてきたのだから、死んでいく時も、無一物で死んでいかねばならないんでしょうなあ」和上のそのお声に重なるように、蓮如上人の『御文章』のお言葉が聞こえてきます。「まことに死せんときは、かねてたのみおきつる妻子も財宝も、わが身にはひとつもあひそふことあるべからず（まことに死ぬ時には、かねてよりたのみとしてきた妻子も財産も、わが身には何一つ付き添ってきてくれません）」
(註釈版聖典 1100 頁、一帖目十一通)



よくよく考えてみますと、私たちは何も持たずに、何も知らずに生まれてきました。なんとも無防備で丸裸の「いのち」。まさに無一物です。そればかりか、自分の足で立つこともままならず、食事もひとりでは出来ない、放っておけば死んでしまうような「いのち」でした。

今になって思えば、生まれた瞬間から不安の塊のような「いのち」だったのですね。だからこそ私たちは、その不安をかき消すために、様々なものを手に入れようとしてきたのでしょうか。知恵、知識にはじまって、地位や財産、健康、人間関係にいたるまで。

そして、全てではないにしろ幾つかのものを獲得してきました。それはまるで裸一つのこの身を守る、鎧のようなものでした。

けれども、その獲得してきたものも、いつかは手放さなければならない日が来るのです。こちらが手放せなくても、向こうから離れていってしまうのです。若さが…、健康が…、そして記憶までもが…。「無一物で死んでいかねばならないんでしょうなあ」厳しいお言葉です。全てを失っていく時、あらためて気づくのかもかもしれません。本来「いのち」が不安の塊であったということに。

そんな時、「ナンマンダブ」とお念仏申すのです。そして、そのお念仏の中に聞かせてもらうのです。この「いのち」をすでに抱きとって下さっている阿弥陀さまのお慈悲を。放ってはおけないという摂取不捨のお心を。

決して一人では生きていけない赤ん坊だった時も、この「いのち」は、放っておけないという親心によって抱かれてありました。だからこそ無一物でありながらも、不安の塊でありながらも、安心して笑顔でいられたのではないのでしょうか。

*無一物という言葉には、何も持っていないという意味の他に、一切の執着を離れたさとり境地という意味もあります。

『交通マナー』

令和元年、日本自動車連盟（JAF）が実施した「信号機のない横断歩道での歩行者横断時における車の一時停止状況全国調査」で、私の住む三重県は全国最下位でした。信号のない横断歩道で歩行者が渡ろうとするときに一時停止をする車が1000台のうち34台（3.4%）という、非常に低い結果でした。普段は他の車のマナーを気にすることはありませんでしたが、この調査結果はショックでした。また、私自身も歩行中自動車にはねられたり、身近な人を事故で亡くしたりしているので運転マナーに一層気を付けなければと感じました。

それから2年経ち、今年同様の調査がなされました。結果は大幅改善されて全国7位、割合で言うと47%の車が一時停止したそうです。新聞やテレビなどでも運転マナー向上は度々アナウンスされていましたし、なにより三重県民が最下位であったことを真摯に受け止めてマナー改善に努めたことが大きかったのではないかと思います。

このことを一過性のものに終わらせるのではなく、三重県が日本一交通マナーの良い県になるといいなと思います。私自身これからも安全運転・マナー向上に努めます。

『月の記憶』



その日はいつもより長いドライブになりそうだったので、私はイヤホンをつけた。運転は夫がしてくれている。何とはなく、90年代、2000年代を共にしてきた音楽を聞き流していく。

一つ一つの曲に私なりの記憶がある。高校生のときにカラオケで歌ったスピッツやドリカム。大学生の時に流行ったスカバンドや、R&B。オザケンや椎名林檎を聴きながら、あの頃はどこまでもよく歩いたなー。などと、感傷に浸っていた。

隣に座っている10年ほどの月日を連れ添った夫は、妻が小さなイヤホンとあの頃にドライブしていることなど知らない。彼には彼の時間が流れている。不思議なもので、毎日顔を合わせていても相手のことなど、あまりよく知らないものだ。

年齢は一つしか違わないが、出会ってきた音楽は同じとは言えない。それぞれに思い出があり、どれだけ手を尽くして説明しても、ふーん・・・で終わることが多い。・・・孤独とは、こういうことを言うのだろうか。

誰一人として、この世界に私の生きてきた時間を知り得る人はいない。頼みの綱の私自身でさえ、正直あてにはならないことを日々感じている。そんなドライブの最中、山の影から現れた月を見て、夫が4歳になった息子に話しかけた。

「月はなんで追いかけてくるんやろな～」

息子は、

「皆のことがわかってるからやで」

と間髪入れずに返した。

夫が驚いた様子で、「何て？」

と、もう一度聞くと、少し面倒くさそうに、

「だから！お月さんは皆のこと大好きなんやあって！」と笑った。

長いドライブはそろそろ終わる。

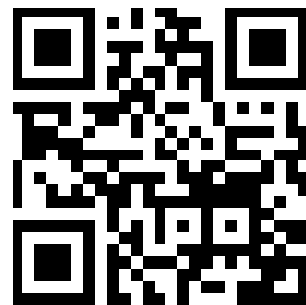
私はイヤホンを置いて、暫く2人の話し声に耳を傾けることにした。

東海教区「公聴会」について

2021（令和3）年度の公聴会が9月にオンライン配信で開催されました。まず石上総長の挨拶、ご門主の『浄土真宗のみ教え』についてのご親教、続いて総合研究所副所長が「浄土真宗のみ教えをいただいて」と題してお話くださり、ご親教への学びを深めさせていただきました。その後（1）宗務の現況について①新型コロナウイルス感染症感染拡大状況における得度習礼・教師教修等について②「子どもたちの笑顔のために募金」についての報告が、その後（2）親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要について（3）新しい持続可能な宗務組織に向けた改革について、担当部長より報告されました。東海教区では66の方が視聴されました。

従来の公聴会は名古屋別院を会場に総局出席で開催していただきましたので、参加者はその場で意見を述べることができ、それに対する総局の答弁があり、参加者はそれらを聞くことで理解を深めることができました。しかし今回はオンライン開催のため、意見は教務所に提出し、取りまとめたうえで総局に提出する形式となりましたので、公聴会の内容に対する自分以外の方の意見を聞く機会がありません。そこで公聴会の内容理解をすすめるために、教区内から提出いただいた意見を掲載させていただきます。

尚、紙面の都合上、すべての意見を掲載することはできませんので編集委員が代表的な意見を選び掲載させていただきました。また文意を損なわないように文章を変更させていただいておりますことご理解ください。教区内の意見の全文は1月31日までの間、右記のQRコードからご覧いただけます。



1月31日まで

【新型コロナウイルス感染症感染拡大状況における得度習礼・教師教修等について】

○感染対策は理解できるが、西山研修道場の定員が120名から50名になり、その結果として今年8月の時点で今年度の得度申込は定員となり締め切りとなっている。この状態が続くと、自身のライフスタイルにあうタイミングでの得度・教師取得が困難になりかねない。

コロナが仮に終息に向かうとしても感染対策は必要だと思われる現在、受講定員がこのままならば、開催回数を増やすとかの工夫をしていただき、申込をタイムリーにできる状況を模索いただきたい。

【子どもたちの笑顔のために募金について】

○婦人会にて活動しています。このたびの公聴会で詳しい内容を知りました。婦人会の集まりもまだ開けない状況が続いていますが、方法を考えて会員の皆さまにもこの取り組みをお伝えしたいと思います。

○「子どもたちの笑顔のために」募金について、集金方法と配布先の説明が主で募金が割り当てのよう感じられ、本来のボランティアとしての活動であることが伝わってきません。

「御同朋の社会を目指す運動」は基幹運動の実践性の不足の克服を目指したはずなのに、「子どもの貧困の克服」が募金活動に止まるのは、本来の運動の趣旨である実践性をないがしろにするものです。

【親鸞聖人御誕生 850 年・立教開宗 800 年慶讃法要について】

○団体参拝の一次募集について、法要直前での大幅減少を生じないように申し込む、とのことですが、現時点ではコロナの感染状況が法要期間中にどのようなになるか見通しが立たないと言わざるを得ません。これまでの大法要での団体参拝を考えますと、バス移動で食事を全員でとることが必須になります。そのような団体参拝を現時点で減少を生じないように申し込むことが難しいように感じました。

法要が厳修される期間にはコロナが収束していて欲しいですし、その時にお勤めする大法要の為に今から決定し準備しなければならないことも多々あることは理解いたします。ただ、コロナ収束下で大法要が勤修されることを唯一の前提とした参拝計画を立てられても、現場として応えていくことが難しいように感じています。一次募集申込以降も感染状況に応じて参拝人数が増減することを前提として、各現場の参拝申込を受け入れるような法要計画を立てていただければと思います。

【新しい持続可能な宗務組織に向けた改革について】

○持続可能な宗務組織についての質問です。組織をスリム化する発想の前提が企業活動をモデルにしたような方向性ですが、宗教活動にはもっと長期的なスパンの見方が欠かせません。宗教活動の要となる教化活動部門では、短期的な成果主義ではなく、もっと長い射程で構想する取り組みが求められます。それは、教化活動の対象となる門徒推進員や仏壯、仏婦、あるいは総代などではいずれも年功序列型の組織運営が行われており、各部門で門徒の窓口となる職員には門徒との長期的な信頼関係が求められるからです。その一方で、成果主義による人材の新陳代謝がより求められるのは、宗会議員ではないでしょうか。当選回数が多いベテランばかりが宗門の意思決定に大きな発言力を保持している構造は、早急に変える必要があります。

○本願寺並びに宗派の財政問題の解決にむけての宗務組織の見直しについて、教区再編などかつてない規模や内容での検討がなされていると聞きますが、我々一般寺院の諸活動や財務にも影響が及ぶと思われれます。改革にむけての協力体制を整えていくには、検討されている事柄が全ての寺院に丁寧に説明され信頼納得していく過程が欠かせません。教区での公聴会では限界があり、広く課題を共有するには困難と言わざるを得ません。そこで私案ですが「各組公聴会」を提起したいと思います。組執行部が中心となって「本願寺と宗派の財政問題、宗務組織の見直し案の報告、各寺院からの意見を受けての討論、教区宗派への提言」という過程を踏めば、今直面している課題が宗派本山だけの問題ではなく各寺院が克服すべきものと気づき、共感をもって新しい体制づくりに参画する機会になることでしょうか。

【その他】

○全般の印象として、本年度より刷新された新たな総局の施策姿勢を感じる事が出来ませんでした。リモートで配信されるのですから、総局が顔をそろえて、各部門の担当総務の意向も前面に出した内容にしていれば良かったと思います。今回は総局としての一体性を確認出来なかったことが残念でした。

○今回の動画による意見聴取は、今後とも活用すべき画期的な手段方法と思います。是非とも早急に視聴率を調査し、全教区各寺院にお知らせ下さい。

①視聴率（視聴の有無）20～30%以下であれば、「公聴会」の意味を成しませんので再度「公聴会」を開催して下さい。

②視聴率過半数を越えているならば、今後の宗務、教務、組務の実務に反映、導入していただく事を切に願います。

『この「連研」を通して、感じたこと 気づいたこと、うれしかったこと を話し合ってください』

松野尾 浩慈（額田組明願寺）

サブテーマ

- ・「連研」を受けて、変わったこと、変わらなかったことはなんですか。
- ・「連研」を受けて、浄土真宗とはどのような教えだと思いますか。
- ・あなたにとってお寺はどんなところですか。

この問いの頃には連研も終盤にさしかかり、ともに時間を過ごした仲間との関係性が生まれていることと思います。この法座では、連研に参加する前もふくめての「これまで」をふりかえり、「これから」に思いを傾けることが目的でしょう。

私自身の経験を申しますと、参加者の皆さんからよく出てくる声は下記のようなものがあります。

- ・おつとめができるようになった
- ・作法が身についた
- ・お坊さんとの距離が近くなった

連研に参加したことが「自信になった」ということは、意味のあることでしょう。

ただ、スタッフはそれだけにとどまらず、もう一歩問いを深めるような投げかけをいただければと思います。

連研の特長の一つは、話し合い法座といえるでしょう。普段は話さないテーマや、家族とも話したことがないことがたくさんあったはずですが。中には向き合ってこなかったことや誰にも話したことのなかったことを開示した人や、差別や戦争、社会問題を自分のことばで話した人もいらっしゃったかもしれません。

この回までにできてきた関係性によっては、「○のテーマはどうでしたか」と聞いてみるのもよいと思います。ふりかえることによって、参加者の皆さん自身の中で、考えが深まったり、意味を受けとめ直す機会にもなります。それが、「これから」を考えるうえで大切なこととなってきます。

私がスタッフとして関わった法座でこんな話をされた方がいらっしゃいました。

「今まで70まで生きてきて、これからは楽しく過ごしていけばいいかなという気持ちもあったけれど、連研に行っているいろいろな面で今後の生き方や考えることを気づかせていただいたのかなと思います。これからは終活で整理していく時代かなと思っていただけ、まだまだ考えていくことがあるからがんばらなければいかんという気になりました。」

この方はその後中央教修に参加し、門徒推進員として精力的に活動されています。

「これから」の自分自身の生き方に思いを傾けていけるような法座になりえるのだと感じました。次の問い12は「生き方」に通じていく問いなので、この法座での気づきはつながっていくことでしょう。

連研修了後には中央教修にぜひ参加奨励していただきたいと思いますが、そこでの最初の法座「であい」はこの問い11のようなかたちで問題提起される講師も多くなっています。ここで出てきた組連研の学びが、中央教修の最初につながっていくことでしょう。

連研に関わる資料について



連研についての問い合わせは、担当
(梅山)までご連絡ください。

『念仏者の生き方とはどのような 生き方なのでしょうか』

加藤 学（桑名組善徳寺）

サブテーマ

- ・生き方が変わるとはどういうことでしょうか。
- ・念仏の教えによって苦しみや不安はなくなるのでしょうか。
- ・「自他ともに心豊かに生きる」とはどのようなことでしょうか。
- ・あなたはこれからどんな人生を送りたいですか。そして何を大切にしていきたいですか。

浄土真宗の教章の中「生活」の項目に、『御恩報謝の生活を送る』とあります。念仏者の生き方とは御恩報謝、報恩の生活であるとも言えるように思いますが、では報恩の生活とはどのようなものなのでしょうか。

ところで、私は料理をすることがほとんどありません。家族との生活で食事はほとんど連れ合いや母が作っています。本来なら、私が食べるのですから自分で用意するはずですが、それをしてもらっているということです。では、その恩に報いる行動とはいったい何なのでしょう。食事を作ってくれたお礼を言う事でしょうか、お皿洗い等の後片付けをすることでしょうか、それとも肩たたきなどで疲れを労うことでしょうか。もちろんそのどれもが間違いではないと思います。ただ、まず第一にしなければならないのは、作ってくれた食事を食べることだと思います。もし食事を食べずにお皿を洗ったとしたらどんなことになるか…。

このことを阿弥陀さまと私の関係で考えてみるとどうでしょう。阿弥陀さまは私のお念仏となつてご一緒くださり、私をお浄土へと往生させ成仏させてくださるお方です。その御恩に報いるのは、まずお念仏を申すということであり、私がお浄土へ往生するという事です。その意味では念仏者の生き方とは何でしょうか？という問いに対して、一つには念仏者として生きることそのものが念仏者の生き方です、ということが出来るかもしれません。

その上で、お互いに自分が念仏者としてどのように生きていきたいのかを話し合えばと思います。話し合いでは、連研に参加する中での気づきから自分のこれからを考えた意見が聞こえてくることもあります。老病死に悲しみ人間関係に悩む私たちの姿に気づく中で、少しでも悩みを聞き悲しみを和らげたいと尽くす方もいるでしょう。気づかないうちに他のいのちを傷つけてきた私の姿を知ったなら、そのことを反省し少しでも改めていくという方もいるでしょう。阿弥陀さまの救いに出遇えた喜びから、一人でも多くの人にみ教えを伝えたいという方もいるでしょう。

ある連研受講者が「私は教えを聞いて、いのち終えるまでどのように生きていくか、これまでよりずっと自由に考えられるようになりました。」とお話しくださったことが印象に残っています。決して捨てられないお慈悲の中だからこそ自由になれたとの思いを感じました。それとともに、この方が言う「自由」とは、私のやりたいことだけを追い求め欲のままに好き勝手に生きるということでもないのだろうと思いました。むしろ、私には絶えず欲の心が起こること、その欲の心が私たちの苦しみのもとであったことを知らされたからこそ、その欲の心に振り回されることからの自由という意味があったのだと思います。そして自由という中に、どれほど尽くしても尽くし切ることはないという自身への厳しさが込められた言葉でした。

組連研での話し合い法座は今回が最終回となっています。どのような私でありたいか、これまで連研に参加してきた方たちと私も一緒に話し合いたいと思います。また、この問いをゴールにするのではなく、改めてスタートを切るためのものにしていければと感じています。

『の』

文・絵：junaida 発行：福音館書店

「の」はいつも、ことばとことばのすきまにこっそりいます。でも、ふだんは目立たない、この「の」には不思議な力があつたのです。その不思議な力がことばをつなぎ、ことばとことばが思いがけない出会いをはたしたとき、そこには見たこともない景色があらわれ、聞いたこともない物語がはじまります。「わたしのお気に入りのコートのポケットの中のお城のいちばん上のながめのよい部屋の王さまのキングサイズのベッドの……」。(福音館書店 HP より)

「第13回MOE絵本屋さん大賞2020」受賞作(第3位)ということで本作を知り手に取りました。福音館HPの紹介にもありますが、「の」という助詞が私たちが素晴らしい空想の世界へと導いてくれます。Junaidaさんの緻密で優しく暖かい絵は、そのまま部屋に飾りたいほど素敵です。

あの人も私もお互いにとっての「の」である。人と人、あるいは世の中の出来事すべてがつながりあっている、そんなことまで考えさせられる絵本です。



『字のないはがき』

原作：向田邦子 文：角田光代 絵：西加奈子 発行：小学館

本来はがきには字を書いて、近況や思いを伝えるものだと思います。その先入観から、タイトルをみただけで引き寄せられる作品です。

この本は向田邦子さんのエッセイを絵本にしたものです。エッセイは向田さんの実体験を元にしたものです。私はエッセイを先に読みました。

内容は太平洋戦争終わり頃のお話です。都市では空襲の被害が増えてきた時期でもあります。子どもたちは危険をまぬがれるため田舎へと疎開にでます。向田さんの小学1年になる妹も疎開にでることになりました。父親は幼く字も書けない子どもを心配し、家の宛先をしたためたハガキをたくさん持たせます。空白の裏面に調子が良ければマルを、悪ければバツを書きなさいと言いつけて、送り出しました。しばらくして、ハガキが返ってきます。最初は大きなマルが記されていましたが、1日たつごとにマルの大きさが小さくなり、最後にはバツと書かれたハガキが届きました。その先は是非絵本をお読みになってください。

絵本になり、作品の雰囲気により深く感じられ、小さい子どもにもやさしく読めるようになっていきます。父親の愛情の深さと戦争の悲しさが全体にただよって、時にいたたまれなく、時に心が温かくなります。

子どもにたくさん読み聞かせしてあげたい作品です。

